

全国 保健師長会 だより

第11回日本公衆衛生看護学会学術集会で、令和4年12月18日(日)に全国保健師長会特別企画(第8回)としてワークショップを開催しました。テーマは「時代とともに変化する地域社会と公衆衛生看護活動のあり方」ICTの活用から見えてきた有用性と住民主体の保健活動を展開する上での課題」とし、現地開催に70名の参加がありました。後日、学術集会のHPにてワークショップ講義をオンデマンド配信で聴講できるようにしました。

国がデジタル化を推進していることを受け、各自治体のDX化推進に保健師が積極的に関与していくと思えるような内容にしたいと、慶應義塾大学田口敦子教授と共に検討しました。当日は、DX・ICTの基礎的な知識からICT

検討し、訪問時間の捻出が課題となり、訪問に持参したモバイルPCに記録を入力し、帰所後に出力してカルテに添付できるシステムとした。その結果、1か月に1.5日の空き時間が確保され3〜6件程度増の家庭訪問が可能になった。また、アプリ検討チームでは、DX推進課と協働して父親や母親との接点を増やす子育て支援プラットフォームを構築し、その機能(チャットのような機能を用いて、特定市民と行政の双方のやり取りを行えるデジタル活用によるシステムの開始に至った。デジタル化によって家族に会う時間を確保しサービス向上を図ることができた。

【活用例「データ収集・管理」プロセスへのICT活用】
最善のケアを提供していくために、「対象者のニーズ」に対して「保健師のケア・サービスの提供」を行う際に、「対象者の価値観」や「環境地域特性」「保健師の感性」としての「専門性」等を踏まえ判断していることが多いだろうが、ここに「データ収集・分析」が加わることで、提供するサービスに最良の根拠を与え、

学会・学術に関する 委員会活動報告

全国保健師長会学会・学術に関する委員会委員長／宮城県保健福祉部保健福祉総務課

高橋みね

の活用事例を通してメリット・デメリットを知る講義と、その内容を受けて、今後、取り組みたいことを考えるグループワークを実施しました。本稿ではその要約を掲載します。講義資料につきましては、全国保健師長会HPに掲載しておりますので、ご参照ください。

1 講義「保健活動に活用できるICTとは？」

慶應義塾大学看護医療学部教授
田口敦子氏

「DXとは」
デジタルイゼーションやデジタルイゼーションで保健活動を効率化することにより時間が創出され、訪問時間の増加や住民目線の新規事業の立ち上げにつなげていくことができたときに、「ICTの浸透が人々の生活をあらゆる面でより

より高い質を担保できると考える。蓄積されたデータを基に対象者などのサービスを提供すれば、どのような「成果」(効果)が生じるかを推測することができ、最良のサービスを判断するに至る。今後DXを推進する時代において、この『データ収集・分析』を踏まえた仕組みをつくることを意識しておくことが大切である。

ただ、現在ケアの質を担保するためのプロセスを可視化できる仕組みがない。必要な改善策を講じるためのケアの質指標が明確でなく測定が難しいということもある。そこで、保健師活動のパスの作成を試みているところである。さらに、ケアの質指標を用いて測定するためには膨大なデータを扱うことになるため、紙媒体ではなくICTを活用した持続的なデータ収集と分析可能なシステムを構築する必要があり、画策している。

【まとめ】
DXで保健活動に何が起ころのか？ 今のうちに何をすべきかを検討することが、大変重要である。DXの推進によって保健活動は大きく変わり、それは現状に+a

よい方向に変化させること」になる。つまり、デジタル化によるサービスの質の向上に主点がある。DXの定義であるように単にICTの浸透が起きているだけでなく、「ICTの浸透が人々の生活をあらゆる面でより良い方向に変化させること」が重要である。

「地域保健分野におけるICT活用の動向」

国の動向として2001年にすでにブランドデザインは示されており推進に時間を要していたが、新型コロナウイルス感染症の影響もあり、Web会議などが導入され、近年ずいぶん進んだ。

平成29年からデータヘルス改革推進本部が設置され「データヘルス改革に関する工程表」(厚労省)が示され、マイナポータルで乳幼児や妊婦、特定健診等の健診・検診

のデジタル化ではなく行政保健師のパラダイムシフトである。意味のあるデータを基に効果的な介入を見いだす仕組み、デジタル化を活用したPDCAの仕組みを構築することが重要であろう。

誰かがつくるシステムではなく、保健活動で活用しやすいICTを導入するために、保健師が主体的に具体的なビジョンを描いて全庁的なDXに参画していくことが大切なことであるので、積極的に情報を得ながら保健活動を行いやすいシステムをつくらう。

2 グループワーク

テーマを「ICT化で取り組んでいること、取り組んでみたいこと」とし、近くに座る4〜5人ほどで意見交換を行いました。

講義の振り返りを通して、活発な意見交換が行われました。システムを作成しても作成した人が異動し



情報の閲覧や、民間パーソナルヘルスレコードとの連携により住民にとってより良いサービス提供を円る仕組みを構築する動きなど、目まぐるしい動きを把握しながら、各自治体の取り組みを進めていく必要がある。

全国保健師長会においては、令和3年度地域保健総合推進事業「地方自治体の保健師活動におけるICT活用に関する調査事業」にて、利用が進んでいる領域は、母子保健、健康増進、高齢者保健福祉、COVID-19を含めた感染症分野であることなど、ICT利用の実態を把握し報告している。

【活用例「住民サービスの向上に向けたDXの推進」】

母子保健分野は、個別、集団、地域とバランス良く活動があり応用性が高い分野である。DXについて先進的取り組みをしている自治体では、コロナ禍前からデジタル化の概念を理解して、全庁的に保健師も含めた取り組みがなされ、デジタル化で保健サービスの質の向上を図ることを狙いとして研修会が開催されていた。

具体的には、ネウボラの推進をた場合、更新やトラブル時に対応ができない等の意見が、複数のグループで聞かれていました。

今回は、ICTの本格的な活用には至っていませんが、DXの推進は必須であることから、保健活動への積極的なICT導入について考える機会になるように企画しました。田口教授から基礎的な考え方やその導入に当たって積極的に保健師が関与していくこと、保健活動の全体を見渡してICTとアナログな活動を併用しながら考えることの重要性を、具体例も交えてご講義いただき、保健活動の新たな展開に前向きに取り組みの気持ちになって終えることができました。

保健活動を検討する際には、取り組みの先に「住民の生活がより良くなる」ことがあり、保健師のリーダーとして保健活動全体を俯瞰して考えることの重要性を改めて確認することができました。

今後も、全国保健師長会の活動として、自治体に所属する保健師の活力になる企画を行っていきたいと思います。